

人間腸詰

夢の久作（夢野久作）

青空文庫

あつしの洋行の土産話ですか。

イヤハヤどうも……あんまり古い事なんで忘れちゃいましたよ。何なら御勘弁願いたいもんで……ただもうビックリして面喰つて、生命から逃げて帰つて来たダケのお話でゲスから……。

……へエ……あの話。あの話と申しますと？　へエ。世界が丸いお蔭で、あつしが腸詰になり損なつた話……。

うわあ。こいつあ驚いた。誰からお聞きになつたんで。へエ。あの植木屋の六から……弱つたなあドウも。飛んでもねえ秘密をバラしやがつて……アイツのお饒舌と来た日にや手が附けらんねえ。死んだ親父から聞きやがつたんだナ畜生……誰にも話したこたあねえのに……。

へエへエ。これあドウモ御馳走様でゲス。こうやつて自分の手にかけてお座敷で、兄弟分がこしれえたお庭を眺めながら、旦那様のお相伴をして一杯頂戴出来るなんて職人冥利の行止まりでげしよう。ヤツ、これあドウモ奥様のお酌で……どうぞお構い遊ばしませんで……手酌で頂戴いたしやす。チイツト世界が丸過ぎるようで。へへへ。

オツトツト……こぼれますこぼれます。

それじゃそのガリガリの一件から世界のマン丸いわけが、わかつたてえお話を冒頭からやつて見やすかね……ガリガリてなあ人間を豚や犬とゴツチャにして腸詰めにする器械の音なんで……へエ。亜米利加に今でも在る。旦那様も御存じ……へエへエ……そのガリガリの中へあつしが這入り損ねたお話なんでゲスからアンマリ気持のいいお話じゃ御座んせん。亜米利加では人を殺すとアトがわからねえように腸詰めにしまうんだそうですからね。今思い出してもゾツとしますよ。お酒のお肴になるようなお話じゃねえんで……何なら御免を蒙りてえんで……。

へエツ。奥様はソナお話が大のお好きと仰言る……恐れ入りやしたなあドウモ。そんな話を聞いてる中に眼尻が釣上つて来て自然と別嬪になる……新手の美容術……ウワア。エライ事になりましたなあドウモ。あつしの嬢なんぞはモウ以前に水天宮で轆轤首の見世物を見て帰って来ると、その晩、夜通し魘されやがったもんで……ほかじやあ御座んせん。手前の首が抜けそうで心配になつちやつたんだそうです。……ヒヤア、抜ける抜けるとか何とか詰らねえ声を真夜中出しやがるんで……篋棒めえ、抜ける程の別嬪と思つてやがるのか……つてんで、背中を一つドヤシ付けてやりましたらヤツト正気付きまし

事あ考えてみた事も御座んせん。

総督府の官舎を建てに台湾へ渡る時にも、乗っている船が陸地おかの見えない海の上を平気でドンドン走って行きますので、何だか妙な気持になっちゃいましたね。私あつしたちを引率している藤村てえ工学士の方に聞いたら笑われましたよ。

「地球は丸いものだから心配しなくてもいいよ。イクラ行つたつて、おしまいにはキット日本へ帰り着くんだから」

「へエ、誰か見た者がおりますかえ」

「見なくたってわかつている。日本男児の癖いに意気地くじが無ねえんだナお前は……。天草の女を御覧……世界が丸いか四角いか、わかりもしない娘ツ子うちの中から世界中を股にかけて色んな人種を手玉に取つて、お金を捲上げちゃあ日本の両親の処うちへ送るんだ。大したもんだよソレア。世界中のどこの隅々に行つても天草女の居ない処は無いんだよ」

「へエツ……成る程ねえ。そんなもんですかねえ」

「まつたくだよ。洋行するとわかる」

「へエ、そんなに天草女つてものは大勢居るんもんですかねえ」

「居るか居ないか知らないが、外国では炭坑でも、金かなやま山でも護ゴム謨林でも開けると器械よ

り先に、まず日本の天草女が行くんだ。それからその尻を嗅ぎ嗅ぎ毛唐の野郎がくつ付いて行つて仕事を初める。町が出来る。鉄道がかかるという順序だ。善い事でも悪い事でも何でも、皮切りをやるのはドツチミチ日本の女だつてえから豪気なもんだよ。まったく思いがけない処でヒヨイヒヨイ天草女にぶつかるんだからね

「へエ。そんな女は、おしまいにドウなるんでしょうか」

「それアキマリ切つている。その中に世界の丸いことがホントウにわかつて来ると、そこで一人前の女になつて日本へ歸つて来て、チャンと普^{あたりまえ}通の結婚をするんだ。又……それ位の女でないと天草では嬢^{かかあ}に招^よび手が無い事になつてゐるんだから仕方がない」

「嫁入道具に地球儀を持つてくようなもんですね」

「まあソナもんだ。だから天草には、世界の丸いことがわからないと洋行出来ないナンテ意気地の無い女は一匹も居ないんだよ」

あつしは余計な恥を搔いたんで赤くなつちやいましたよ。それでもイクラか安心するに
はしましたがね。

ですから亜米利加^{アメリカ}へ渡る時には相当、落付いておりましたよ。仲間の奴に……大工と左官とで、植木屋の六の親子も入れて十四五人ぐれえ居りましたつけが……そんな連中に基^キ

一
隆で買った七十銭の地球儀を見せびらかして、日本の小さい処を講釈して聞かせたりして片付いておりましたがね。その中に毎日毎日アンマリ長いこと海の上ばかりを走って行くのに気が付くと妙なもので、理窟は呑込んでいる癖に、何となく心配になって来ました。今でも初めて洋行する人は、よくソクナのような頭のヘンテコになる病気にかかるんだ。それで、熱ぐらいあったかも知れません。別に何ともないのに、何だかミンナが欺されて島流しにされるんじゃないやねえか。佐渡が島へ金坑掘りに遣られるんじゃないやねえか……なんて考えているとドウモ頂くものが美味しく御座んせん。毎日毎日そのライスカレーとシチウとコロツケに飽きちゃったのかも知れませんがね。

その中に船の中で演芸会が初まりました。あつしがステテコを踊ることになったんで……船の中に派手な三柵模様の浴衣と……その頃まだ団十郎が生きておりました時分で……それから赤い禪木綿と、スリ鉦、太鼓、三味線なんぞがチャント揃ったのには驚きましたよ。

当日になると中甲板の五六百人ぐらい這入る広間に舞台が出来て、そこへ一等の船客から吾々特別三等の連中まで一パイになって見物するんで、皮切りにヒョウキンな西洋人の船長が飛出して西洋手品を初める。ナカナカ鮮かなもんでしたが、これ当たり前でさあ。

そのあとへ日本人が上つてヤツパリ西洋手品を使いましたがアンマリ冴えません。メード・イン・ジャパンが今でも幅の利かないのは手品ばかりでしょう。その中^{うち}にあつしのステテコの番が来たんで立上ろうとしているところへ今の植木屋の六の親父でゲス。その時はモウいい禿^{はげ}頭^{あたま}の赤ツ鼻でしたっけが、あつしから世界の丸い話を聞^きてからというものは毎日甲板に出て、船の周囲^{まわり}をグルグルまわつてゆく蓄音器のレコードみたいに平べつたい海を見まわしながら首をひねつていた奴なんで……その日も、あつしと組になつてステテコを踊ることになつていたんですが、そいつが派手な浴衣に赤^{あか}禪^{ぜん}のまんまボンヤリ甲板から降りて来やして、出^での囃子^{はやし}を聞いているあつしの顔をジイツと穴のあくほど見ながら、小ツポケなドングリ眼^{まなこ}をパチパチさせたもんです。

「おれあドウしてもわからねえ」

「何がわからねえ」

「世界が丸いてえ理窟^{りくつ}が……」

「馬鹿^{ばか}だな手前^{てまえ}は……イクラ云つて聞かせたつてわからねえ。台湾へ渡つた時にヤツトわかつたつて安心^{あんしん}してたじゃねえか」

「それはお前^{まえ}だけだ。俺^{おら}あアレからチツトモ安心していねえんだ。不思議でしょうがねえ

んだ」

「何が不思議だえ」

「だつて考えても見ねえ。あの地球儀みてえなマン丸いものの上にドウしてコンナに水が溜まつているんだえ……。おまけに大きな浪が打つてるじゃねえか……。ええ……」

そう聞くとあつしも頭の芯がジンとして考え込んじまりました。口では強いことを云いながら心の奥ではやつぱり心配していたんですね。そこが病気のセイだったかも知れませんが、凶星を指されてハツとしたようなアンバイで変テコレンな眼のまわるような気もちになつちやいました。そこいらがだんだん薄暗くなつて気が遠くなつて行くようなアンバイで……。そのまんま引つくり返つちやつたらしいんです。気が弱かつたんですね、あつしは……。もつともその時にはモウ六の親父と一緒に揃つてソナ病氣にかかつていたんだそうですから仕方がありませんがね。妙な病氣があればあつたもんでゲス。癩癩なら差詰め地球癩癩だったのでしようが、そんなオボエは毛頭なかつたんで……。自分でも、おかしいと思いましたよ。

ですから同じ病氣にかかつていた六の親父も、あつしが引つくり返つたのを見ると直ぐに追っかけて引つくり返りやつたんだそうで……。これは大変だと思つたトタンに世界中

が平ベタクなつたてんですからダラシのねえ野郎で……お蔭でステテコはオジャンになつちまいました。誰が云い出しものか知れませんが、モトモト平べつたい処に住んでいる人間に「世界は丸い」なんて罪な御布告おふれを出したものですよ。まつたく、大本教おおもときょうのお筆ふでで先でさきに引つかつたみてえで……それから亜米利加へ着くまで二週間ばかりの間、六の親父とあつしと二人で上甲板の病室に入れられてウンウン云つておりました。

アトから聞いてみると揃そろいも揃そろつたステテコが二人つながつて引っくり返けえつた。場違いのステテコだ……てんで船中の大評判になつたんだそうで……おまけに二人とも……大変だ大変だ……とか何とか変な譚うわごと語を並べたもんですから、念のために血を取つて調べてみると恐ろしいもんでゲス。浮気の痕跡あとがタツプリと血の中に残っている。この白痴野郎こけツ……てな毒の名前なめえだつたと思ひますがね。へエ。そのゴノゴツケンゴノゴツケンの陽性やうせいなんで、テツキリ脳梅毒……何をするかわからねえということになって閉しめ込みを喰くつたもんです。その又、船のお医者つて奴がチャチな塩しよっぱい野郎だつたのでしよう。その中うちにホントの病氣の名前なめえがわかつたんだそうですか……。

へエ。その病氣の名前でゲスカ。エエト……そうそう六の親父おやじのが「野垂のたれ死に」てえんで、あつしのが「鸚鵡おうむ・小便シッコ」てんだそうで……笑いごとじゃねえんで……へエ。ノス

タレジイ……ノスタルジヤにホーム・シックでゲスカい。どうもおかしいと思った。お笑いになつちや困ります。二人とも熱が八度ばかり出ましたよ。日本へ帰ってから聞いてみたら舶来の神経衰弱なんだそうで……重いのがノスタレジイで軽いのがオーム・シッコでんだそうですが、ハイカラな病気があればあるもんですな。派手な浴衣の赤禪に、黄色い手拭の向う鉢巻がノスタレのオーム・シッコでウンウン云つてるんですから世話ありやせんや……。

それでも亜米利加へ上陸^{あが}すると二人とも急に元気になりましたね。聖路易^{セントルイス}へ着くと直ぐに建前^{たてまえ}にかかりやした。藤村てえ工学士さんが引いてくれた凶面の通りに台湾式の御殿を建てましたが大した評判でげしたよ。ソレアあつしとノスタレ爺^{じい}の写真が大きく新聞に出ましたよ。ノスタレ爺の方は植木屋でゲスからその台湾館の前に作った日本式のお庭が大受けに受けちやつたんで……ノスタレ爺の野郎は雪舟の子孫だつてえ事になつたんでから呆^{あき}れて物が云えませんや。あつしの方はモットおかしいで……あつしはこれでも小^こ手斧^{ちような}の癩^{あき}持ちでげして、小手斧^{ちような}の木片^{こつぱ}が散らかるのが大嫌いでげす。そこで最初^{ノツケ}から手を附けた四十尺ばかりの美事な米^{べいまつ}松^{むなぎ}の棟木^{むなぎ}をコツンコツンと削^{こな}して行く中^{うち}に四十尺ブツ通^{つな}しの継^{つな}がった削屑^{アラ}をブツ放しちやつたんで、見ていた毛唐^{きも}の技師^{うち}が肝^{きも}を潰^{つぶ}したもんだ

そうです。その話が亜米利加中の新聞に出たつてんで、あつしが船の中で退屈しの凌ぎに作った箱根細工のカラクリ箱が、まだ博覧会の初うちまらねえ中にスツカリ売約済みになる。六の親父おやじをお雪の旦那のPIPEイモルガンで奴が買いに来るつてなアンバイで大した景気でしたよ。毛唐つて奴はつまらねえ事を感心するんですね。へへへ。

その中うちに屋根の反そツクリ返けえつた、破風造のお化けみてえな台湾館が赤や青で塗り上げて、聖路易セントルイスの博覧会がオツ初はじまる事になりますと、今のノスタレとオーム・シツコが二人でフロツキコートてえ活弁かつべんのお仕着せみてえなものを着込んで入口の処へ突立つて、藤村さんから教おそわつた通りの英語を、毎日毎日大きな声で怒鳴るんです。

「じゃばん、がばめん、ふおるもさ、ううろんち、わんかぶ、てんせんす。かみんかみん」
お笑いになつちや困ります。何てえ意味だかチツトモ知らなかつたんで……最初うちの中は茶目好きの藤村さんが「右や左のお旦那様」を英語で教えたんじゃねえかと思つてました。がそれでもないらしいです。お大師様の「あぼきやあ兵衛べえ。露西亞ロシヤのう、中村だあ」式の英語で、毛唐の厄払いか、荒神祀まつりの文句じゃねえかとも考かんえてみましたがそれでもないらしんで……ズツト後あとになつて聞いてみましたら「日じ本専売局がばめん。台ふおるもさ湾ううろんあん烏龍茶かづんせ一杯 十

銭んす、イラハイ《かむいん》イラハイ《かむいん》」てんですから禁まじ厭ないにも薬にもなれ

あしません。

もつともこのお祓はらいの文句の意味が、そんなに早くからわかってたら、あつしの生命いのちは無かつたかも知れません。舶来ソウセイジの腸詰ソウセイジになつちやつて、毛唐くそしやうべんの糞小便くそしやうべんに生れかわつていたかも知れねえんで……変テコなお話でゲスが人間の運てえものは、ドンナ事から廻り合わせて来るか知れたもんじや御座んせん。正直のところ「わんかぶ、てんせんす」と米なの生なる木があつしの生命いのちの親いのちなんで……。

とにかくソイツを訳のわからねえまんまに台湾館の前に突立つて、滅法めつぼう矢鱈やたらに威勢よく怒鳴つていとドシドシ毛唐が這入つて来る。台湾館の中では選拔よりぬき飛切りとびきの台湾生れの別嬪べっぴんが、英語ペラペラで烏龍茶の講釈をしながら一枚八仙セントの芭蕉煎餅ばしやうせんべいを出してお給仕をする。その毛唐らが這入りかけや出て行きがけにあつしとノスタレセントに五仙セントか十仙セントずつ呉れて行きます。たまには一弗ドルも五弗ドルも呉れる奴ドルが居る。そうかと思うと何も呉れねえでソツポ向いて行く猶太人ジユウみてえな奴も居るつてな訳で、いいお小遣ドルいになりやしたよ。

その中うちに英語がチツトずつわかつて参りやした。水の事を「ワラ」つてんで……ワラワセやがるてのは、これから初まったのかも知れませんが。舟に乗つて来るのがナベゲタ。席よ亭話せはなしの鍋草履なべぞうりてえのと間違せはなしいそうですね。女の事が「レデー」ですから男の事が「デ

レー」かと思つたら豈あにはか計らんや「ゼニトルマン」でげす。成る程これあ理窟でゲスが失
 礼したくなりますね。奥さんのことが「ママ」……「女はマモノ」ってえ洒落しやれかも知れま
 せんがドウカと思いますよ。「お早よう」てのが「グルモン」、こいつは「グル」だけ
 も間に合います。江戸ツ子の「コンチワ」が「チャア」で済むようなもんでげしよう。今
 晩はが「グルナイ」。「勝手にしやアガレ」てクツ付けてやりてえくれえで……「左様な
 ら」が「グルバイ」……どうしてこう毛唐はグルグル云いたがるんだか……獣けだものから人間に
 なり立てみてえで……もつとも毛唐は毛の字が付くだけに手も足も毛ムクジャラですから
 ね。女なんかでも顔はパヤパヤとした生う毛げだらけで身体からだ中は鳥の毛を撈むしつたようにブツ
 ブツだらけでゲス。傍へ寄ると動物園臭くつて遣り切れませんがね。男でも女でも物を呉
 れるたんびに「タヌキ」と云つてやると喜んでるんですからヤツパリ獣けだものなんでげしよう。
 とところが、その毛唐のタヌキ野郎に非道ひどい目に合わされたお話なんで……獣けだものだけに悪智
 恵にかけちや日本人は敵かたいませんや。

あつし等が人寄せをやっている台湾館の中には六人の台湾娘が居て、お茶の給仕をして
 ありました。そいつ等の名前なまえは三十年も前めえの事ですから忘れちゃいましたが、何でもフン、
 パア、チヨキ、ピン、キリ、ゲタつてな八百屋の符牒ふでみたいな苗字の女の子が、揃つて台

灣選り抜きの別嬪ばかりなんで、年はみんな十七か八ぐれえの水の出花でばなつてえ奴でしたが、最初さいしょつからの固いお布告ふれで、そんな女たちに指一本でも指したら最後の助すけ、お給金が貰えねえばかりでなく、亜米利加でタタキ放しにするという蛮爵ばんしやく様からの御達しなんで、おまけに藤村さんは藤村さんで、一足でも博覧会場から踏み出すことはならねえ。亜米利加の町にはギャングとかガメンとかいう奴がどこにでも居て昼日中でも強盗や人浚ひとさらいをやらかす。気の弱い奴と見たらピストルで脅威おどかして大盜賊おおどろぼうや密輸入の手先にしちまうから気を附けろ。一度ソナ奴に狙われたら生きて日本に帰けえれねえからそう思えつてサンザ威嚇おどかされておりましたからね。何の事あねえ不動様の金縛りを喰くった山狼やまいぬみてえな恰好で、みんな指を啣くわえて、唾液つばきを呑み呑みソナ女たちを眺めてるばかりでした。

可哀相に女の出来ねえ職人たら歌を忘れたカナリアみてえなもんで……へエ。あつしや今でも気が若い方なんで、その頃はまだ三十になるやならずの元氣一杯の奴が、青い瞳めをしたセルロイドじゃあるめえし、言葉も通じなけあ西も東もわからねえ人間の山奥みてえな亜米利加三界へ連れて来られて、毎日毎日そんな別嬪たちの色目づかいを見せ付けられながら涙声を張り上げて、

「わんかぶ、てんせんす。かみんかみん」

をやらされているんですから、たまりませんや。ノスタレ爺もオシッコのオシッコも眼が釣上つちやつて、今にもポンポンパリパリと破裂しちまいそうな南京^{ナンキン}花火みてえな気もちになつちまいましてね。哀れとも愚かとも何とも早や、申上げようのない「ふおるもさ、うろろんち」が一對^{つゐ}、出来上つたもんでGes。

ところがここに一つうまい事が持上りました。その女たちの中でも一等^{さば}捌けるピン嬢^{ちゃん}とチヨキ嬢^{ちゃん}という二人がノスタレだかオシッコだかわかりませんが病氣になつちやつたんで、とりあえずの埋め合わせに聖^{セント}路^ル易^{イス}の支那料理屋に居たというチイチイつていうのとファイつていうのと二人の別嬢^{べつじやう}が手助けに来たんでげす。何しろ一人で卓^{テーブル}子を六つ宛^{ずつ}も持つているんで一人欠けても頬^ほ返^{おげ}しが附かないですからね。占めた。こいつは有難いことになつたもんだと私^{あつし}は内心でゾクゾク喜んじやいました。ねえ。そうでしょう。今まで居た女には指一本さしても不可^{いけ}なかつたかも知れねえが、今度来た女なら差^さ支^しえなからう。しかも向うが二人前ならこつちも二人前と云いてえが、片^はつ方^{はた}が禿^{はげ}頭^{あたま}の赤ツ鼻のノスタレじゃ問題にならねえ。若さといい、男前といい、一番^{くじ}鬪^{ほんくじ}の本鬪^{ほんくじ}はドツチミチこつちのもんだがハテ。ドツチから先に箸^{はし}を取ろうかテンデ、知らん顔をして「わんかぶ、てんせんす」のおまじないを唱えながら二三日ジツと様子を見ているとドウです。このチイ嬢^{ちゃん}

とフイ嬢ちやんの二人が一緒に、あつしの方へ色目を使い初めたじや御座んせんか。

へへ……どうも恐れ入りやす。おつとつと……こぼれます、こぼれます。どうもコンナに御馳走になつたり、勝手なお惚気のろけを聞かしたりしちや申もうしわけ訳御座んせんが、ここんところが一番恐ろしい話の本筋なんで致いたしかた方が御座んせん。どつちみち混線させないようにお話しとかないと、あとで筋道がわからなくなりやすからね。へへ、恐れ入りやす。

二人の中うちでもフイフイっていうのは、まだ十七か八の初ういうい々しい聡明りこうそうな瞳めをした、スンナリとした小娘こむすめでしたが、あつしに色目を使いはじめたのはドウヤラ此娘こいつの方が先だつたらしいんです。台湾館たいわんくわんに来る匆そうそう々どうどうから何やら物を言いたそうな眼付きをして、あつしの方を見ておつたように思いますかね。そいつを一方のチイチイって娘やつが感付いて横槍よこざやを入れたものらしいんです。へへへへ。その通りその通り。あつしの取り合いっこが始つた訳なんで、へへへ。へへへ。大した色男になつちやつたんで……油をかけちやいけません。ああ暑い暑い……イエイエ。モウ頂けやせん。ロレツが廻らなくなつちや困るんで……アトにモノスゴイ話がつながつてるんでゲスから……へへ。

………というのはこのチイチイって奴が大変なものなんでげす。あとから聞いた話では支

那人と伊太利人の混血娘だったそうですが、とても素晴らしい別嬪でげしたよソレア。おまけにテエブルの六ツは愚か二十でも三十でも持つて来て下さい。一人で捌いて見せるからナンテ大それた熱を吹きやがって、来る早々から仲間にも憎まれておりましたがね。生やさしい女じや御座んせんでしたよ。

そうですねえ。年はあれでも二十二三ぐらいでしたらうか、スツカリ若返りにしておりましたので一寸見はファイ嬢よりも可愛いくれえで、ファイ嬢とお揃いの前髪を垂らして両方の耳ツ朶に大きな真珠をブラ下げた娘が、翡翠色の緞子の服の間から、支那一流の焦げ付くような真紅の下着の裾をビラ付かせながらジロリと使う色眼の凄かったこと……流石のあつしも一ぺんにダアとなつちやつたんで……流石のだけ余計かも知れませんが、誰だつてアイツにぶつかつたらタツタ一目のアタリ一発でげしよう。ハタからファイ嬢がオロオロ氣を揉んでいるようでしたが、そうなるもモウ問題じや御座んせん。

その場でインキを二つ三つぶつ付け合うと……ヘエ……ウインクですか……どうも相すみません。亜米利加じやインキの方が通りがいいんで……ツイうつかり、そのインキの方にきめちやつたんで……そいつに氣が付くとファイ嬢が慌てて卓子の向うからあつしに手を振つて見せましたが、そうなつたら夢中でゲスから氣にも止めません。ただその時にフ

イ嬢ちゃんを振り返つて睨み付けたチイ嬢ちゃんの眼付の怖しかった事は今でも骨身にコタえて記憶おぼえております。その睨みにぶつかつたフイ嬢ちゃんが、真青になつてフラフラとブツ倒おれそうになつたんですからね。あつしもズツあと後になつて、そのチイ嬢ちゃんの睨みの恐ろしい意味がわかつてスツカリ震え上がつちやつたもんですがね。

その晩のことです。あつしは台湾館の地下室で一緒に寝ているノスタレ爺に感づかれなようにソーツと起き出して、首尾よく台湾館を抜け出しちやいました。それから約束通り噴水の横でチイ嬢ちゃんに会つて、演芸館の裏で夜間出勤のサンドウイチマンを二人買収して、チイ嬢と二人で薄い布張りの四角い箱の中に這入つて、入口の看守にテケツだけ見せて会場を抜け出しました。アトから考えるとあつしやこの時にいい二本棒に見立てられていたんですなあ。節劇ふしげきの文句じや御座んせんが「殺されるとは露知らず」でゲス。屠所とじよの羊どころじゃねえ。大喜びで腸詰ソーセージになりに行つたんですからね。

博覧会の会場を出るともう、カイモク西だか東だかわからねえ聖路易セントルイスの町つづきでさあ。イルミネーションの海の底を続きつながつて流れて行く馬車と電車の洪水でサ。その頃はまだ亜米利加にも円タクなんてものが無かつたんですからね。

あつしの先に立つたチイ嬢ちゃんは、一町ばかり行つた処の薄暗い町角に在るポストの下で立た

停ちどまりましたから、あつしもその横で立停ちどまって巻煙草に火を点つけました。すると間もな
 く白い馬を二頭附けた立派な馬車が来て、ポストの前に止まりましたが、それを見るとチ
 イ嬢ちやんはイキナリ 広サンドイチ 告サントイチの服を脱いで地面じべたに放り出して、その馬車に飛乗つて手招きする
 んです。ですからあつしも慌わてて女の真似をして馬車に飛乗つるトタンに、前後左右のスク
 リンを卸おろしたチイ嬢ちやんがあつしの首ツ玉にカジリ付いてチュウツ……へへへ……どうも相す
 みません。ここがヤツパリその本筋なんで……このチュウツてえ奴ソージェが 腸タネ 詰タネの材料に合格
 の紫スタムプみてえなチューだったんで……實際眼くが眩くらんじましたよマツタク。いい
 芳香においが 臟腑はらわたのドン底まで泌しみ渡りましたよ。そうなると香水においだか肌の香においだか解いかれあし
 ません。おまけにハツキリした日本語で、
 「まあ……よく来てくれたねえ、アンタ」
 と来たもんです。

トタンに前後の考えなんか、笠の台と一緒にとつかへふツ飛んじやいましたね、キチガ
 イが 焼しょうちゅう 酎ちゅうを飲んで火事見舞に來たようなアンバイなんで……暫くして女がスクリンを
 上げてから気が付いてみると、その馬車の走り方のスゴイのにチョット驚おどきましたよ。ほ
 かの馬車をグングン抜いて行くので、金ピカ服の交通巡査が何度も何度も向うから近付い

て来て手を揚げて制止にかかったようでしたが、私等の馬車に乗っている黒い頬鬚を生した絹帽の馭者がチョット鞭を揚げて合図みたいな真似をすると、どの巡査もどの巡査も直ぐにクルリと向うを向いて行つちまつたんです。

それが右へ曲つても左に曲つても、どこまで行つてもどこまで行つてもそんなんですから、あつしはだんだん不思議になつて来ましたが、アトから聞いてみると無理もない話です。その馭者というのが旦那様……聖路易切つてのギャングの大親分で、カント・デックてえ凄い奴だつたそうです。聖路易の町中の巡査はミンナこのデックの乾分みてえなものだつたつてえんですから豪勢なもので……しかも一緒に乗っている支那娘のチイ嬢と、もう一人のフイ嬢とは揃いも揃つてこのカント・デックの妾だつて事がそんな時のあつしにわかつたら、そのまんま目を眩しちやつたかも知れませぬ。地球が丸いどころの騒ぎじゃ御座んせんからね。

それでなくとも何だか少々、薄ツ気味が悪くなりかけているところへ馬車が止つて、一軒の立派な明るい店の前に着きました。チイ嬢はそこであつしのキタネエ首根ツ子に今一つキツスをしますと、あつしの手を引きながらその店の中に這入つて行きましたが、それは大きなレコード屋だつたんですね。スバラシイ花輪や流行児の歌い手らしい男や女の

写真が、四方の壁一パイに並んでいる店の広間へ、縦横十文字に並んだ長椅子に凭りかか
 った毛唐と女唐とが、フロック張りの番頭や手代の鳴らすレコードを知らん顔をして聞い
 ていたようです。

その横ツチヨの木煉瓦張りの通路をやはり女に手を引かれながら通り抜けて、奥の
 行当りのドアを抜けるとヤット肩幅ぐらゐの狭い廊下に出ました。その廊下は向う下りに
 なっていて、黒いマットが一面に敷いて在るために足音も何もしまま地下室へ降りて
 行くようになっていたらしいんですが、その中に右に曲ったり左に折れたりして扉を三つ
 か四つぐらい潜つて、もうだいたい下へ降りたナ……と思つたトタンに廊下の天井に点いて
 いた電燈が突然に消えちやつて真暗闇になつちまいました。それがチイ嬢の顔の見納
 めだつたんで……今度目、見た時は夕刊の新聞で手錠をかけられた笑い顔で、その次に見
 たのはデックと並んで死刑の宣告を受けている写真ニュースの横顔でしたかね。

もちろんソンの時のあつしにやそんな事がわかりつこありやせん。神様だつて知らなかつ
 たんですから……それと一所に女も手を放しちやつたんですから、あつしはタツタ一人
 真暗闇の中に取り残されちやつたんで……往生しましたよ。まったく。

それでもまだ自惚れが残つていたんですから感心なもんでげしよう。さては女がイタズ

ラをしやがったんだナ……ヨオシ……その気ならこつちでも探り出して見せるぞ……てんで鬼ゴツコみたい到手探りで向うの方へ行きますと、いつの間にか廊下の行当りの扉ドアを通り抜けて一つの立派な部屋に出ていたんですね。不意討ちにパツとアカリが点ついたのを見ると、太陽が二十も三十も一時に出て来たようで今度こそホントウに腰を抜かすところでしたよ。何しろそこいら中反射鏡ダラケの部屋に、天井一パイの花電燈が点ついたんですからね。

世の中には立派な部屋が在れば在るもんだと思いましたがねえ。この節なら銀座へ行けアレ位の部屋がザラに在るんですから格別驚かなかったかも知れませんがね。何の事はない、竜宮みてえな金ピカづくめの戸棚や、椅子、テーブル、花束や花輪で埋みまった部屋なんで、ムンムンする香水の匂いで息が詰りそうな中にタツタ一人突立みすっている見み窄すぼらしいあつしの姿が、向うの壁一パイに箆め込んで在る大鏡に映つたのを見た時にや、思わずポケットへ手を当てましたよ。コンナ立派な部屋でチイ嬢ちゃんを抱かいて寝た日にや、イクラ取られるかわからないと思ひましてね。そこまで来てもまだ瘡毒かさげ気が残かっていたんですから大したもんでGes。

「アハハハ。お金のこと心配してはイケマセン……ミスタ・ハルキチ……アハハハ……」

だしぬけに大きな笑い声でしたのでビックリして振向きますと、あつしの背後うしろの大きな蘭の葉陰から四十年輩の夜会服の紳士が、歩み出して来ました。その柔らかな笑顔を見ると、たしかにどこかで会ったことの在る顔だとは思いましたが、どうしても思い出せません。真逆まさかにツイ今サツキ乗って来た馬車の馭者が黒い頬髯を取ったものだとは気付きませんでしたので、多分台湾館に居る時にチツプを余計に呉れたお客の一人じゃないかと思ひながらホツとタメ息しておりますと、その紳士は右手を差出して、あつしと心安そうに握手しながら一層、眼を細くして申しました。しかも、それが片言まじりの日本語なんです。

「……アナタ……この家がドンナ家うちですか、よく御存知でしょう。それでですからメンド臭いお話やめましょうね。用事だけお話しましょうねえ。コチラへお出いで下さい」

と私を手招きしながら部屋あつしの隅の巨大な銀色の花瓶の処へ来ました。それは人間ぐらいの大きさの花瓶に蝦夷菊えぞぎくの花を山盛りに挿したもので、四五人がかりでもドウかと思われ、るのをその紳士は何の雑作ぞつさもなく一人で抱え除のけますと、その花瓶の向うの寄木細工よせぎざいくの板壁の隅に小さな虫喰いみたいな穴が二つ三つ出来ております。その穴の一つに紳士が、時計の鎖に附いている鍵を突込みますとパタリと音がして二尺に二尺五寸ぐらいの壁板が開あいて、奥の浅い十段ばかりに仕切った棚があらわれました。それがその毛唐の紳士が片言

まじりの日本語と手真似で話すのを聞いてみるとこうなんです。

——この秘密の棚を錠前を使わないで開けられるようにしてもらいたい。材料と道具は入用なだけ直ぐに取寄せてやる。お前は台湾館の横で売っている不思議な箱根細工のマジック箱を作った大工さんだろう。だからアノ箱根細工の通りにここへ秘密のカラクリを取付けてもらいたいのだ。そうしてその開き方を自分にだけ教えて、直ぐに日本へ帰ってもらいたいのだ。お金はイクラでも遣る——

と云うのです。毛唐人の大工なんてものは無器用でガスからあの箱根細工のような細かい仕事がお手本を見せられても真似られないらしいですね。

しかしあつしはこの時に虫が知らしたんでげしよう、何となく……これあイヤナ処へ来たナ……と思いましたが。ちいつと虫の知らせ方が遅う御座んしたがね。とにかく……

「これあ何に使う棚だい。その目的がわからなくちゃ作る事あ出来ねえ」

て云ってやりますとね。その毛唐がホンノちよつとの間までしたつけが青い眼を剥むき出して恐しい顔になりましたよ。けれども直ぐに又モトの通りの柔和な顔に返って、前の通りの愛嬌のいい片言まじりの日本語で手真似を初めました。

「これは宝石の袋を仕舞しまつとく棚だ。私は昔からの宝石道楽で世界中の宝石を集めるのが

楽しみなんだから、万一泥棒が這入っても心配のないようにコンナ仕事を頼むんだ。千弗^{ドル}でも一万弗^{ドル}でも欲しいだけお金を上げる。あの娘も付けてやっていいから是非どうか一つ請合つて下さい」

てんで見かけに似合わずペコペコ頭を下げて頼むんです。

「私は亜米利加中に別荘を持つているのだから万一ここで貴方^{あなた}の仕事が気に入ったら、まだ方々で、お頼みしたいのだ。貴方に一生喰えるだけの賃金を上げる事が出来るのだ」

と顔を真赤にして揉み手をしいしいペコペコお辞儀をするんです。カント・デックは前からチャンと研究して、あつしを口説^{くど}き落す手を考^{かんげ}えていたらしいんですね。仕事の出来る日本人なら金を呉れて頭を下げさえすればあコロリと手に乗って来るものと思つていたらしいんですが、コイツが生^{あいにく}憎なことに見当違^{あやまち}いだったのです。イクラ「わんかぶ、てんせんす」だつて時と場合によりけりです。支那人^{チャンチャン}と違つて日本人には虫の居どころつて奴がありますからね。

あつしはデックの話の聞いている中^{うち}にピインと来ちやいました。さてはあのチイ嬢^{ちやん}の色目は喰わせものだったのか、この毛唐人が俺をここまで引っぱり込むために罠^{おとり}に使つてやがったのか、この野郎、俺をいい二本棒に見立てやがったんだな、俺を女で釣つて泥棒仕

事のカラクリ細工に使おうとしやがったんだナ。して見るとコイツア飛んでもない処へマグレ込んで来ちやつたぞ。しかもここまで深入りしたからにやトテも生きて日本にや帰れぬえ……と気が付くと腰を抜かすドコロかあべこべに氣持がシヤンとなつちまいました。

……妙な性分であつしは氣が長い時にやヤタラに長いんですが、何かの拍子にカーツとしちまうと、それから先が盲滅法めくらめつぼうに手ツ取り早いんで……篋棒べらぼうめえ日本人じゃねえか。金やピストルに眼が眩くらんで毛唐の追剥おいはぎや泥棒の手伝いが出来るかつてんだ。「ふおるもさ、うろろんち」を知らねえかつてんで、イキナリその毛唐に組付いて大腰をかけようとしたもんです。これでも柔道二段の腕前ですからね。

へエ。それあ見上げたもんでしたよ。そこんどだけがね。アトがカラツキシ意氣ね地が無えんで……。

今から考かんげえてみるとあん時によく殺されなかつたもんで……多分、出来ることならあつしを威おしかし上げて柔順おしなしくして、彼の棚の扉の細工をさせようつてえ腹だったのでしょう。……コイツは日本一の細工人に違ちがいがない。コイツを取逃とりがしたら二度と再びコンナ細工は出来つこねえ……ぐれえに考かんげえていたのかも知れませんがアブネエもんでゲス。今から考かんげえるとゾツとしますよ。

組み付いたと思つた時にやカント・デックに両腕をシツカリと掴まれておりました。しかもその指の力の強さつたらありません。あつしの腕の骨が粉々こなごなになつて行くような気持ちで、身体中が痺れ上つちやいました。トテモ敵かなわないと思わせられましたね。手錠をひきちぎ引千切つて逃げたつていう亜米利加でも指折りのカント・デックですから、柔道二段ぐれえじや齒が立ちませんや。

デック野郎はあつしの腕を掴んだまま顔の筋一つ動かさねえでニコニコしながら吐ぬかしました。

「アナタ。憤おこるといけません。あたしカント・デックです。ゆっくりして下さい。面白いものを見せますから……」

と云ううちにあつしを廻転椅子みたいにクルリと向うむきにして軽々と抱え上げて、横のドアから出て行きました。

「いけねえいけねえ。俺おれあ明日あしたつから又、台湾館の前に突立つて怒鳴らなくちやならねえ約束がして在るんだ。放してくれ放してくれ」

と大暴れに暴れたもんですが何の足しにもなりません。そのまんまその次の部屋だったか、その次の部屋だったか忘れましたが、小さな粗末な部屋へ抱え込まれますと、その

コンクリートの荒壁に取付けられている一枚硝子の小窓から向うの部屋を覗かせられました。ちようど赤ちゃんがおシッコをさせられるようなアンバイ式にね……。

あつしは暴れるのをやめてボンヤリと見惚れてしまいましたよ。向うの部屋の状態がアツマリ非道いんで、呆れ返ってしまったんです。

へエ。それがドウモここではお話出来難いんで……お一方お揃いの前ではねえ。へへへへ……。

何の事あねえ。水溜りに湧いたお玉杓子でゲス。それがみんな丸裸体の人間ばつかりなんですから開いた口が閉がりませんや。相当に広い部屋でしたがね。大きな椰子や、橄欖や、ゴムの樹の植木鉢の間に、長椅子だのマットだの、クッションだの毛皮だのがおおなみ大浪のように重なり合っている間を、甘ったるい恰好の裸虫連中が上になり下になりウジャウジャとのたくりまわっているんですからトモ人間たあ思えませんよ。金魚鉢に鱈をブチ撒けたぐらいの騒ぎじや御座んせん。

不思議なものでね。そんなのを見せ付けられながらエロ気分なんてコレンバカリも起りませんでしたよ。今考えてもあの時の気持ばつかりはわかりませんがね。多分、冥途の土産……てえな気持で見えていたんでしよう。何がなしに見つともなくて、馬鹿馬鹿しく

て、胸が悪くなるようで、横ッ腹の処がゾクゾクして無性に腹が立って来ましたが、そのあつしの耳へカント・デツクの野郎が口を寄せて吐かしやがったもんです。

「あそこへ行きたいなら仕事をなさい」

あつしは又、あらん限りの死物狂いにアバレ初めました。部屋の中がムンムンと暑いので、汗みどろになってしまいました。何しろ太刀山たちやまみたいな強力ごうりきに押えられているのでゲスから子供に捕まったバツタみてえなもんで……ウツカリすると手足が撈もげそうになるんです。

「そんなら今一つ面白いものを見せましょう」

と云うと今度はその小窓と反対側の低い扉ドアを開けて、そこに掛かっている鉄の梯子はしご伝いに奇妙な眩まぶしい広い部屋へ降りて来ました。日本へ帰って来てから早稲田大学へ仕事をしに行つた時にヤットわかりましたが、あれが水銀燈というものだったので。部屋のズット向うの隅のアーク燈みてえな眩まぶしい、妙な色の電燈が一つ点ついているキリなんです。その光りで見るとカント・デツクの顔色から自分の手の甲の色までも、まるきり死人のような鉛色に見えるんです。それでなくともあつしはサツキから死物狂いに暴れたアトで精も気魂も尽き果てておりましたので、カント・デツクの片手に吊下げられたまま死人

のように手足をブラ下げながらそこいらを見まわしますと、それはどこかの工場の地下室
としか思えません。コンクリートの天井と、床の間が頭の問える位低い、ダダツ広い部屋
になっていて、ジメジメと濡れたタタキの上には机も、椅子も塵つ端一本散らかつて
おりません。ただ向うの隅の水銀燈の下に、大きな大理石の白みたようなものがあつて、
その中で天井から突出たモートル仕掛けの鉄の棒がガリガリガリと廻転しているだけ
なんです。つまり特別謎えの大きな肉挽器械ですね。博覧会の中で見たことのあるソー
セージ製造器械なんです。

しかしスツカリくたびれ切つて、物を考える力も何もなくなつていたあつしにはソレが
何の意味なんだかサツパリわかりませんでした。……ハテナ……蓄音機屋の地下室が、腸
詰 工場になつていてのか知らん。コンクリの床の上をズルズルと引き摺られながら、
その白の処へ連れて行かれましたが、別に怖くも何ともありませんでした。

けどもカント・デックに首ツ玉を押えられてその白の中を覗かせられた時には、思わず
ゾツとして手足を締めちやいましたよ。その白は、もちろん底抜けなんで、その底の抜け
た穴の上にステキに大きな肉挽き器械のギザギザの渦巻きが、狼の歯みたいに銀色に光り
ながらグラグラグラと廻転しているのですから落っこつたら最後、何もかもおしまいでさ

あ。頭から尻までゴチャゴチャになってしまふんですからドンナに有難いお経を聞かされたって成じょうぶつ仏出来つこありません。

「あなた。この中に這入ること好きですか……仕事しますかしませんか」

流石さすがのあつしも……流石でなくたってヘタバツちまいますよ。イクラ元氣を出そう……好きじゃありません……と云おうと思つても身体からだ中がコンクリートみたいになってガタガタ震え出すんですから仕様がありません。お笑いになりますけどもその場へ行つて御覽なさい。ナカナカそう平氣でいられるもんじや御座んせん。自分が何を考かんげえていたか、今でも記憶おぼえていない位なんで、多分氣絶する一步手前だったのでしよう。タツタ一つ眼に残っているのはあの鉛色の水銀燈のイヤアな光りだけなんで……まったくあの陰氣臭い生冷なまづめてえ光りばかりは骨身に泌みて怖ろしゆうがしたよ。ネオン・サインが極樂の光りなら水銀燈は地獄のアカリなんでしょう。生きた人間でも死人に見えるんですからね。今思おもい出してもゾオツとしちまいますよ。

そこヘカント・デックが何か合図をしたのでしよう。ズット背後うしろの方の薄暗い処の扉ドアが開いて、青い菜なツ葉服ばふくを着た顔中髷だらけの大男が一人トロツコをノロノロと押しながら出て来たんです。その時まで氣が付かなかったんですが、その入口から肉挽にくひき器械の前ま

で幅の狭い軌道レールが敷いて在ったんで……その菜ツ葉服の男が押ししているトロッコが、あつし等の眼の前まで来て停まりますと、そのトロッコの上に乗っているものの上に被かぶせた白い布片きれをカント・デックが取除とりのけました。そうして思わず「ワツ」と云つて逃げ出そうとするあつしをガツシリと抱きすくめてしまいました。

それは若い女の丸裸まるはだか体の死体だったのです。しかもその小さな下唇を前歯で噛み破つたらしく鼻の下から乳の間へかけてベツトリとコビリ付いている血が、水銀燈に照らされて妙に黝くろずんだ腮鬚あごひげみたいに見えるのです。おまけにその右の手の中に何かしら大切なものを握り込んでいるらしく、シツカリと握り固めている上から左の手を蔽おほいかぶせてピツタリと胸の上に押え付けている姿が、たまらなくイジラシイものに見えましたが、その黒い髪毛かみの前の方を切り下げている恰好がドウ見ても西洋人とは思えません。支那人か日本人に相違ないんで……。

そう思っている中うちに菜ツ葉服の大男が、カント・デックに腮あごでシヤクられると直ぐに一つうなずいて菜ツ葉服の袖口をマクリ上げて、あつしの太股ふとももくれえある毛ムクジャラの腕を二本、突出しました。その熊みたいな手で何の雑作もなく女の手を解とかせて、シツカリ握とっている右手を開かせますと、中から見覚えのある台湾館備そなえつ付けの桃色の支那便箋

を幾つにも折つたものが出て来ました。そのレターペーパーの折り目を拵げたやつを受取つたカント・デックは、あつしの鼻の先にブラ下げて見せながら、今一度ニコニコと笑いました。赤チャンをあやすような顔で、あつしの顔を覗き込みましたがね。

それは筆と墨で書いた立派な日本文でした。多分、台湾館の事務室に在つた藤村さんの硯箱すざりばこを使ったものでしょう。昔の百人一首に書いて在るような立派な文字でしたがね。「チイちゃんと一所に出かけてはいけません。チイちゃんは支那人です。亜米利加のギャングの手先です。わたくしはチイちゃんと一緒にギャングのメカケになった、かわいいような日本の女です。あたしの事を日本の両親につたえて下さい。」

天草早浦はやうら生れ

ハル吉親方様

中田フジ子より」

その死骸ちやんがフイ嬢ちやんの死骸だとわかると、あつしは何かしら叫びながら飛び付こうとしたように思います。今までに無い力が出たので、あぶなくデックを振り離すところでしたが、そのあつしの左の手首をガツシリと掴み止めたデックは面と向つて立ちながら今一度ニヤニヤと笑つて見せました。

「わかりましたか。仕事しますか」

「何をッ」

とか何とか怒鳴ったように思います。だしぬけに思いがけない力が出たもので、鉄の嘴くちばし縮イト器みてえなデックの手を振放して、火の玉のようになって相手に飛びかかろうとしましたが間に合いませんでした。背後うしろから菜ツ葉服の男に息の詰まるほどガツチリと抱きすくめられちやっただんです。そうして犬ころでも棄てるように軽々とデックの夜会服の腕の中へ投なげわた渡されちやっただんです。

あつしを受取ったデックは喰い付いたり引つ搔いたりするあつしの手と足を背後うしろから束たばにしてギューと掴み締めてしまいました。それから何か英語で二言三言云ったと思うと毛ムクジャラの菜ツ葉服が、トロツコの上の女の身体からだを抱き上げて、何の雑作もなく傍の肉挽器械の中へ投込みました。

……へエ。その時に肉挽き器械の中から聞えて来た恐ろしい声を、あつしは一生涯忘れないでしょう。フィ嬢ちゃんはまだ生きてたんです。多分、日本人のあつしを救たすけるためにギヤング仲間を裏切った廉かじで、デックの配下てしたに拷問されて気絶していたものなんでしょう。

あつしもそのまんま気絶していたようです。

「じゃばん、がばめん、ふおるもき、ううるんち、わんかぶ、てんせんす。かみんかみん」
 てお呼び声がどこからか聞えるように思つてフイツと眼を開いてみるてえと、コンクリ
 ート作りの馬小舎ごやみてえに狭い藁束わらたばだらけの床の上へ投げ出されているのに気が付きま
 した。

片隅トアの扉の前に置いて在る汚いバケツの中を這い寄つて覗いてみますと、ジャガ芋と肉
 のゴツタ煮の上にパンの塊かたまりと水と、牛乳の瓶が投込んで在ります。……つまり何です
 ね。まだあつしを殺す気じゃなかつたのでしよう。あわよくば仲間仲間に引っぱり込んで仕事
 をさせる氣でいたのでしよう。

しかしあつしは助かつたのが嬉しくも悲しくも何ともありませんでした。今から考かんげえて
 みるとあの時はヨツポド頭が変テコになつていたんですね。やっぱり地球癩てんかん癩癩の続きだ
 ったかも知れませんでしたかね。自分がどこに居るやら、どうなつて居るやらわからない
 まま、眼が醒めない前めえから続けていたらしい譫うわごと言を、そのまんま云いつづけておりま
 した。

「じゃばん、がばめん、ふおるもき、ううるんち、わんかぶ、てんせんす。かみんかみん」
 と繰り返し繰り返し大きな声で云つてたようですが、口癖くせつてもものは恐ろしいのです

ね。

ところがこの御祈祷の文句のお蔭で、無事にこうやって日本に帰ることが出来たんですから、人間の運てえものはドコまでも不思議なもので……へエ……。

博覧会の方では大騒ぎだったそうです。あつしと二人の女がダシヌケに行方不明になつたてんで警察に頼んだり何かして騒いだそうですが、わかる氣づかいはありませんや。氣の毒なのは藤村さんで、あつしの代りに礼フロツキ服を着て台湾館の前に立たされて、代りが出るまでノスタレじい爺と一所に「わんかぶ、てんせんす」をやらされたもんだそうで、二三日やつてる中にお尻のポケツヘジャラジャラ銀貨が溜まったのはいいが、声がスツカリ嘎かれちやつて電話にかかれなくなつちやつたそうで……無理もありませんや。木遣りなんか唄つたこたあねえんですからね。おまけに怒鳴りながらも、ずいぶん氣も揉もんだそうですからね。……多分あつしが二人の女を誘かどわか拐わしたんだろうテンデ、あべこべに世話あした支那料理店から台湾館が損害を取られそうになつちやつたそうで……大工の治はる公こうつて奴はソナ大それた人間じゃねえテンデ藤村さんが一生懸命、頑張ってくれたそうですかね。そのうちに聖路セントルイス易イの何とか云いましたつけが、目貫めぬきの通りに在るホテルの七階の屋上

に夜遅くなつてから幽霊が出る。そいつがドウヤラ新聞に出た台湾館の行方不明の客呼び男らしいという噂がホテルのお客さんたちの間に立ち初めました。馬鹿馬鹿しい怪談ですがね……治公はるこうがまだチャント生きているのに幽的ゆうてきが出る筈はないんですが、毛唐つて奴は元来ゾツコン怪談おぼけばなしが好きなんだそうで……つまらねえものを怪談おぼけにしちまう癖があるんだそうですが、そんな噂がどこもなく散り拡がって行く中に運うちよくギヤング連中の耳に這入らないまに、藤村さんの耳に這入つたもんです。

「貴女あなた……お聞きになりましたか、あのホテルのお化けの話を……」

「イイエ。まだ聞きませんわ。聞かして頂戴」

「一週間ばかり前からの事です。真夜中の二時頃……電車の絶とまる頃になるとあのホテルの屋上庭園のマン中に在る旗竿の処へフロツキコートを着た日本人の幽霊が出るとです。ホラ直ぐそこに若いスマートな男と、赤つ鼻の禿はげ頭あたまが立っているでしょう。あの通りの姿で幽霊が出て来て、あの通りの事を云うんだそうです」

「アラ怖い……ホント……」

「ホントですとも……それがあの新聞に出た行方不明の……ホラ……ずっと前に来た時にあすこに立っていたでしょう。ミスタ・ハルコーっていうあの男の姿にソツクリなんだそ

うです」

「まあ……ホテルじゃ困っているでしょうねえ」

「ところが反対あへこべですよ。お蔭で屋上庭園に行く者は一人も居なくなつた代りに、その声を聞きに行く者であるのホテルは一パイなんだそうです。警察ではまだ知らないそうですが、あの日本人の行方不明事件はあのホテルと台湾館とが組んでやっている日本人一流の宣伝方法に違いないってミンナ云つておりますがね」

「シツ聞えるわよ。日本人に……」

「ナアニ。彼奴等あいつは英語がわかりやしません。暗記あいつした事だけを繰り返している忠実な奴隷なんですから……」

こんな話を入口の近くの卓テーブルでやっているのを小耳に挿んだ藤村さんが、指を折つて数えてみると、ちようどあつしが行方不明になつてから八日目だつたそうです。

藤村さんは西洋通ですから直ぐにピインと来たんでしよう。直ぐにその晩ホテルへ泊つて、夜中の二時頃コツソリと屋上庭園へ来てみると世にも哀れつぽいかす微かな微かなあつし
の声で、

「じゃぱアーン。がばアーンめんとオー。ふおるもつさあアー。うう……ろん……ちいイ

「イイ。わんかぷう……ウ。てんせえんすう——ツ……」

てやっているんだそうです。そこで藤村さんは胸をドキドキさせながら抜き足、さし足その声の聞える方に近付いてみると、その声の主は屋上庭園のどこにも居ない。その向い側のメイ・フラワ・ビルディングの七階の片隅に在る真暗な小窓の中から聞えて来る事が、夜が更けて来るにつれてハッキリとわかつて来た……というんです。

しかし亜米利加通の藤村さんは決して慌てませんでした。何喰わぬ顔をして翌る朝、台湾館へ帰つて来ると直ぐに華盛頓ワシントンの大使に頼んで、紐育ニューヨークのプレーグつていう腕つき腕つきの警察官に頼んだものだそうです。

ちようどそのプレーグつていう警察官は一生懸命になつてギャングの巢を探していたところだつたそうで、早速紐育ニューヨークの警視庁へズキをまわして取つときの刑事や巡査を借りて聖路易セントルイスへ乗込んで、土地の警察へも知らさないようにメイ・フラワ・ビルの様子を探ると、出入りする奴はみんな変装した前科者ばかりなんで、イヨイヨそれと目星を付けて水も洩らさねえように手配りをきめた二十人ばかりのプレーグの配下てしたが、アツという間もないうちにメイ・フラワ・ビルビルの地下室から七階まで総マクリにしてしまいました。双方とも怪我けが人や死人が出来たりして一時は戦争みたいな騒ぎだつたそうですが、あつしはチ

ツトも知りませんでした。そこから抱え出されて聖路易セントルイスの市立病院の病床ベットに寝かされても相も変らず「わんかぶ、てんせんす」をやっていたそうです。

……とところで、まだ話があるんです。これからはホントに凄いですね。

あつしがあらん限りの注射と滋養物のお蔭で、やっとモトの頭になって退院させられた時はもうユーカリの葉が散つちやつた秋の末で、博覧会なんかトツクの昔におしまいになつておりました。退院すると直ぐに警察に呼び出されて、ほんの型ばかりの訊問を通訳附シスコきで受けますと、領事さんからの旅費を貰つて桑港シスコから日本へ帰りましたが、その途中のことです。たしか出帆してから十日目ぐらいのお天気の良い朝でしたがね。あんまり航ナベゲ海タが退屈なもんですから、眼が醒めても起き上る気がしません。そのまんま特別三等とくさんの寢床の中で足をツン伸ばしてアーツと一つ大きな欠伸あくびをしたもんですが、そのトタンに桑シ港スコで知り合いの領事館の人からお土産に貰つた小さな紙包みのことを思い出しました。ハテ何だつたらうと思ひながら、寢床の下のバスケットの中からその紙包を取り出して開けてみると、どうでげす。それが平べったいソーセージの缶セントなんです……。

コイツは占めたと思つて飛び起きると、食堂から五十二仙セントの日本ビールを一本買つて来

て、ベツトの上にアグラを搔きながら、缶の蓋を開けて、美味うまそうな腸詰ちようづめの横ツ腹をジャクナイフで薄く切り初めたもんですが、その中うちに何やらナイフの刃はに擱からまるものがあります。……ハテ……おかしいなと思ひながら、そのナイフの刃を暗い窓あかりに透かしてみるとソイツが黒い女の髪の毛で……あつしはドキンとしましたよ。それでもマサカと思ひながら今のソーセージの切口をよく見ると、薄桃色の肉の間に何だか白い三角型がたのものが挟まつているようです。ハテナと思ひ思ひホジクリ出してみると、そいつがどうです。三分角ぶかくぐらいの薄桃色の紙かみきれ片の端なんで……永いこと赤い肉の間に挟まつてフヤケちゃつていますから色合いなにかアテになりませんし、紙の質だつて支那出来のレターペーパーだか何だか、わかつたもんじや御座んせんが、それでもその紙が、その黒い髪の毛と一つ所ところに這入つていたことだけは間違ひねえんで……。

それでもマサカ……とは思ひましたがドウモ変な心持ちになりましたよ。あつしに惚れていたファイ嬢ちやんが、あつしの身代りにソーセージになつて、ここまで跟ついて来たんじやねえか……ナンテ考かんげえておりますと、最早もはや、ビールの肴さかなどころじや御座んせん。こつちの頭がソーセージみたいにゴチャゴチャになつちまいました。世界の丸っこい道理がズンズンとわかつて来るように思ひましてね……まつたく……へエ……。

……ヘエ。どうも奥様……いろいろと御馳走様で……これで御免を蒙りやす。

青空文庫情報

底本：「夢野久作全集の」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年3月24日第1刷発行

※底本の「腸詰《ソーセージ》に」を、「腸詰《ソーセージ》に」に改めました。

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2004年1月5日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人間腸詰

夢の久作（夢野久作）

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>